
● 沖 縄

上 地 隆 裕

今シーズンの沖縄楽壇では、地元出身者を主体とするクラシカル音楽演奏の諸相が整備され、近來になく盛況であった。その一方で創作の分野は相変わらず低調に終始。目立った作家の輩出が皆無、の一年でもあった。今後の課題は、地元の演奏家および演奏団体に、同じく地元の作家による作品を演奏させ、それを如何に、よりナショナルそしてグローバルな方向へ転じて行くか、だと思ふ。

そこで大切なのは、そのような活動あるいは運動を側面から支援するマスコミの存在だが、今のところ当県では残念ながら、その部分が脆弱かつ研究不足だ。

それではここから各論の報告に入ろう。シーズンを通じて突出した動きを見せたのは、まずオーケストラ（勿論地元の！）である。ほぼ毎月（計18回）公演が行われ、その牽引役は例年同様琉球交響楽団（大友直人・音楽顧問）が担った。

先陣を切ったのは、シュガー・ホール・オーケストラ。地元紙によれば同団はプロ組織だが、実態は本土で活躍する本県出身のプロ奏者を主体に、地元の選り抜きを加えて編成した、いわば「七夕オーケストラ」のような団体。そしてそれに琉球フィル（代表・上原正弘）が、本県初となる外国人の常任指揮者G・チチナゼを据えて続いた。同団は創立早々から児童青少年を対象にアウトリーチ活動を本格化し、ゲーム音楽の演奏会にも進出、広範囲かつ柔軟性のある取り組みを展開、今後の活動に期待が膨らむ。

加えてアマチュアの老舗沖縄響（指揮・大勝秀也）、沖縄フィル響（指揮・庭野隆之）両団の健闘。また大度室内管、カンマー・ゾリスデン、更に金管・木管の各アンサンブル（特に東京響の首席ホルン＝上間善之を主体とする第一回ホルン・アンサンブルは好演）も、精力的な活動を見せた。

またアンサンブル熱は先島にも伝播、日本最南端の楽団として「石垣フィルハーモニー管弦楽団」（指揮・庭野隆之）が結成され、ベートーヴェンの合唱交響曲に挑み、文字通り産声を上げた。また宮古島市では「みやこじま国際音楽祭」が創設され、五月に「イヴリー・ギトリス」、八月にはドイツのマンハイムから市立音楽院青少年交響楽団をゲストに招いて、島始まって以来の大掛かりな公演が行われた。

その元気なオーケストラ界同様、オペラ分野でも数多くの収穫を上げた。白眉は「ドン・カルロ」全曲公演（提供・沖縄オペラ協会）。高額な入場料もなんのその、二日連続でほぼ満員を記録し、イタリア・オペラの香りを、南島の音楽シーンで振り撒いた。今なお新作が相次いで登場するほど民謡の盛んな当県で、オペラ公演（しかも出演者は地元主体！）のフルハウス連発は奇蹟的。主宰者の翁長剛にはその功績に対し、志島音楽賞が贈られた。

最後に外来、地元独奏・独唱陣の報告。まず外来では、上記のギトリスをはじめ、チェコ・フィル楽員で構成する弦楽トリオ、シュトゥットガルト放送響の金管・木管首席メンバーで構成した室内楽、ピアノのファジル・サイ、地元勢では川上一道（CL）、第17回長江杯国際コンクールを制した糸数知（Sp.）、ブ

ルガリアでの公演を実現した黒島舞李子（Sp.）らを筆頭に、各ジャンルで意欲的な公演が相次いだ。その中でフルーティストの渡久地圭は音楽事務所「オフィス・ダンケ」を主宰、演奏者としての活動を起点に、演奏会やレクチュア等を企画＝OIST・沖縄科学技術大学院大学ホールでの室内楽とバレエのジョイント公演など、広範囲にアウトリーチ活動、及び本県初の試みとなった職業演奏家の育成プロジェクトを実施。今後もその活動が注目される。